

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
京子 道を		かげろう 朝香	隆夫 るみ子	子舎 京風 萬蝶		由美子 一葉 風舎 チアキ	修	六弦 マスミ		粉雪 由美子 清吉 正信	いちい	月を 鶴城	六弦 稀香 いちい 萬蝶 芳春	隆夫 由美子 道を
路面近くにある露のとうは、こうして首をもたげるのですね。「内緒話」が上手。	春雪や疫禍を知らず降つてをり	大きめに制服詠ふ春立つ日	春の朝空に溶け行く星一つ 中旬が良い。朝の表現が素敵。	梅が香や二軒先には紀伊のひと 梅は紀州に限ります。軽みと思わせぶりな言い回しが優れている。二軒先の距離で梅の香と紀伊が程よく響く。	暗記帳電車遅延の大試験	沈丁の香を闇に預けて旅枕 ミステリアスな魅力を感じます。「闇に預けて」の措辞が句に奥行きを与えている。軽みと思わせぶりな言い回しが優れている。闇に預けて旅枕、味わい深い。	雪解の雫の先の黒い土 屋根の雪が融けて雫が落ちる庭の光景を上手く描写。	春めきて畦行く人の背に鋏 土の香りのする粋な句で「背に鋏」が効いている。春を待ちかね、畑に出ずにはられない気持ちよく伝わる。	凍蝶の荷に羽休め峠越え	家中を犬従へて鬼は外 ユーモアがあり「ふ、ふ、」となります。桃太郎さんですか？なんだかユーモラス。節分の夜の光景をユーモラスに表現している。猿、雉は揃わなくてもせめて犬だけ連れて桃太郎を気取るパホームンスが秀逸。	メレンゲの角際やかや浅き春 つややかに白いメレンゲのつのに温度を感じる。	できたての春を知らせる光る雨 清新なイメージです。出来立ての春と光る雨の対比が良い。	立春やただそれだけで嬉しき日	島国に遠き島々ありて冬 シンプルで素直に共感出来る春です。同感です、年々寒さに弱くなりました。素直に共感できる。この気分共感できます。
望月のぞみ	小沢こうじ	本橋稀香	かげろう	新 曆文	青木 鶴城	丸山 マスミ	木村 るみ子	寒立 馬	木村 隆夫	秋谷 風舎	荒 一葉	古賀 由美子	檜鼻 ことは	菊池 ひろこ

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16
	允孝 正信 ひろこ	ことは 静香 芳春	のぞみ			隆夫 修 允孝	月を	るみ子 朝香	香 六弦 芳春		るみ子	マスミ	のぞみ	
朝寝坊うれし半分小言聞く	春浅し肌理ととのほぬ陶狸	春風は地球の吐息かも知れぬ	鬼やらひ朝には鳩らが来るこそに	猫の子や耳を摩りて雨を知る	神前へ誓ふ二人や春景色	細やかな庭師の手先緑摘む	山鳩の啼けば瞬く名草の芽	頂へ初東風と行く峠道	春寒や一献待てぬ寄席帰り	菠薐草むかしの波斯今イラン	マチネーの余韻にひたる春夕焼	春燈や乾杯の手に江戸切子	啓蟄やかさこそ動くだんご虫	力溜め明日へ羽ばたけ冬の蝶
持永喜夫	正木萬蝶	日高道を	山中いちい	網野月を	石関六弦	村杉清吉	後藤允孝	奥山粉雪	小林京子	染谷正信	後記朝香	野田静香	井口俊晴	保坂翔太

45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	水明インターネット句会（選句・選評） 令和四年二月
	ことは 清吉 のぞみ		一葉 稀香 喜夫	粉雪	かげろう	稀香			マスミ			清吉 鶴城 チアキ		朝香	
立春や水澄みたる人間川	薔薇の芽や近づき難き父がいて <small>只事でない緊張感ですね。父親との関係性と季語との取り合わせが想像を膨らませてくれる。</small>	冴返る狛兔の神社昼静か	黙（もだ）深き辻立ちの僧春浅し <small>緊張感のある景に季語が生きている。修行僧の姿が春寒の景にくつきり浮かぶ。街頭の中の静けさが伝わってきます。</small>	波たいら太平洋に春きたる <small>大きな景色の春です。</small>	ハリハリと音の馳走の水菜かな	東風吹かば流行り病に戸を立てる <small>音で春の喜びを感じさせるオノマトベがよい。</small>	春空に猫宙返る着地決む <small>菅公の名句の東風がコロナ禍の現代では、このように皮肉に捉えられますよね。</small>	食べないで声聞こえたり石路の花	ハーブティー春をおひとついかがです <small>明るくて洒落たお誘いが楽しい。</small>	甘夏の山を彩る黄一色	冬季五輪孤立してゐる風見鶏	せせらぎが転げてゐるよ雪解光 <small>「転げてゐるよ」の表現が新鮮であり、光景を豊かにしている。雪解光にきらめくせせらぎを「転げてゐるよ」と軽く表現した。雪解の水がきらきら光って、せせらぎに転じているよ 上手</small>	「天と地」の和洋楽曲春兆す	黄水仙ケ・セラ・セラよと風のまま <small>季語の黄水仙が中七下五とよく合っている。明るさがよい。</small>	
小沢こうじ	新 曆文	かげろう	丸山マスミ	寒立馬	荒 一葉	青木鶴城	木村隆夫	秋谷風舎	古賀由美子	木村るみ子	菊池ひろこ	檜鼻ことは	宮崎チアキ	岡田芳春	

60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46
ひろこ	一葉 かげろう	翔太	京子			曆文 修喜夫		ひろこ				曆文 翔太 静香 正信 鶴城	曆文	翔太 月允 孝道を いちい 萬蝶
白鳥が帰省しておりわが田んぼ 白鳥が自分の田圃に、いつものことなのでも、偶然なのでも、喜びが感じられる。	春の虹トリプルクーラー080 空に舞ったスケボーの彼方に希望の虹が見える。下五は1440では。採点競技なのですごい大技でも評価されない時もある儂さ、そして、一瞬で行われて見逃すともう見れないというところが、半円形のハーフパイブコースとも相まって季語とベストマッチしている。	子の好きなカツの朝食大試験 大試験に勝つようにカツを食べさせる。言い古されてはいるが親心である。	夏蜜柑口もとすばむ君思ふ 夏蜜柑の酸っぱい恋心にキユン	咲く桃や節句待てずに六畳間	恋の猫向ふ傷つけ朝帰り	春耕や祖父塩だけのにぎり飯 春耕と塩おむすびの取合せが見事。塩むすびから働く姿が見えてきます。	拝見の棗の塗りや冴え返る	濡れてゐる釣り銭二枚山笑ふ 釣銭の状態に目をつけ、「山笑ふ」でそれを許している。	恋の猫産めよ殖せよ骨限り	煌めきの凄みや増せり冬星座	さざ波に洛陽を乗せ橋おぼろ	揚げ雲雀絶望なんて無縁です 自分もこの様な句、詠んでみたいですね。揚げ雲雀の季語が効いている。元氣の出る句である。空高く舞い上がり、そして急降下する雲雀の天真爛漫な姿はまさに青春真っ盛りだ。そこには絶望のかけらも無い。	初恋のふみながら入るる夕焚火	病棟をつなぐ廊下の余寒かな 入院患者には名ばかりの春は堪える。余寒かなの切れ字が有効。新興俳句的叙述を感じます。病院の廊下はどことなく不気味さと肌寒さを感じます。季語の幹旋が素晴らしい。景とともに気温や匂いが感じられる。渡り廊下の冷え冷えした感じが余寒と合っている。コロナ病棟か。
山中いちい	日高道を	後記朝香	村杉清吉	石関六弦	井口俊晴	後藤允孝	小林京子	網野月を	染谷正信	奥山粉雪	野田静香	望月のぞみ	保坂翔太	本橋稀香

75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61
											ことは 粉雪 風舎 喜夫 チアキ			
											品のあるお母様のお姿、白寿、おめでとうございます。良い光景が目に見え、浮かびます。白と紅が鮮やか。温かい、作者の思いやりと親子関係が、うかがわれる。目出度さが伝わってくる。作者の優しさが伝わってきます。白寿のお母様の幸せが、紅をさし、一段と際立つ。	春や春フィギュア選手の踊りか	草青む土偶の女体ふくよかに	春寒や春を探しに小鳥来る
											岡田芳春	宮崎チアキ	正木萬蝶	持永喜夫